理由がない悪意のクエスト。

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理由がない悪意のクエスト。

【Ｎコード】
Ｎ２５６５Ｚ

【作者名】
オシノ

【あらすじ】
生活に困った冒険者。つまり僕のことなんだがお金欲しさについつい、身の丈に合わない仕事を請け負ってしまった。スライムにトロル。マッドサイエンティストが造った【キラーマシン】、挙句の果てにはベテランの冒険者、あまつさえ王家に選ばれた勇者でさえも手を出さない魔女とまでやりあうことになってしまう。一緒に戦ってくれる仲間もいなければ、友達もいない。孤立無援の貧乏人が、レベル不相応のクエストに挑む冒険ファンタジー。

・冒険のはじまり

＋＋＋

お金がない。
安定した収入もない。
人望もない。
恋人もいない。
このままでは、魔王を倒す戦士としてやっていけるかの自信もない。

いや、自信が無いだけなら取り戻せばいいのだが、問題はそんな簡単なモノではなかった。
この先、冒険者としてやっていく展望がなかなか見えないからだ。
要するに、今現在のこの職業に一抹の不安を持っている。

考えてみれば三年前。
「僕は、世界一の冒険者になる」と言って実家を飛び出したは良いが、現実はそんなに甘くなかった。
勇者一族の血統を引く人間なら、王家から経済的な支援を受けられるし、なにか他の冒険者が持ってないような特技（例えば魔法）を持っていればギルドからスカウトがきて仕事に困ることもない。
が、僕はサラブレッドでもなければ他人より秀でた特技もない。
国からの支援も無ければ、ギルドに頼ることもできないのだ。
冒険者という人生に、僕は完全に行き詰っていた。

けれども食べていくためには、モンスターや賞金首を倒してお金

を稼がなければならない。
今住んでいる部屋の家賃は二ヵ月滞納しているし、水も止められた。

僕は情報を集めるために酒場に来た。酒場のいっかくには情報斡旋所がある。
そこにはこの地域一帯の情報が集まってくる。
賞金首や、倒すとお金がもらえるモンスターの情報。新しいダンジョンが近場で発見されればそれを教えてもらうこともある。

酒場の端っこにある小さなカウンターが情報斡旋所として使われていた。
一人がけの椅子に狭いテーブルがあるだけのそのカウンターは、酒場にあるが酒を飲むためにあるわけではない。
そこには何年もこの仕事を続けているであろう、手と顔に長い時間を物語るシワが深く刻まれたバアさんが座っていた。

「仕事の情報を貰いにきたよ。バアさん」
「おぉ、また来たのかい。ご苦労さんなことだね」
お互い名前を知らない。それくらいの薄っぺらな関係なのだ。
仕事の情報を聞ければ、僕はそれでかまわないと思っている。

「それでどうだい、なにか良い仕事は入った？」
「良い仕事はみんなギルドに持ってかれちまってるよ。場末のこんな所に回ってくる依頼はどうしようもない下らないものか、ギルドや勇者でも手に負えないようなドギツイ仕事だけさ」
そんな仕事はやりたくない。
けど食べていくためにはやるしかない。お金が無いのだ、仕事を選べる立場ではない。

「レベル3の冒険者でもこなせるような簡単なクエストないの？」
「うーん、レベル3ねえ。今は初心者にちょっときびしいような仕事しかないねえ。アンタ特技はなんだい？」
「……特にありません」
自分に自信が無かったので小声でささやくように言うと、
「なんだって？聞こえないよ！」年寄りの耳には聞こえなかったらしく聞き返された。
「うーん、特にないんだけど、しいて言えば孤独に耐える能力が高いですかね」
聞こえるように少し大きめなけで言いなおした。
「……使えないねえ。今の時代は人より秀でたものが一つ二つ、いや三つ程ないとやっていけないよ。だいたい孤独に耐えるって仲間がいないだけだろ。それじゃあウイークポイントだよ」
「……」
言われてみればバアさんの言うとおりだ。

・酒場から自警団までの道のり

＊＊＊

「今はアンタみたいな低レベルの戦士が単独でこなせるようなクエストはないね」
「そこを何とかお願いします」
手を合わせ、まるで神様を拝むようにバアさんに手を合わせる。
「そんなコト言われたってないものはないよ。自殺志願者だったら別だけどね」
死にたくはない。だがこのまま仕事をしなかったら餓死してしまう。
状況的には、引くに引けない。
まるで前門の虎、後門の狼。

「畜生……。僕はどうしたらいいんだ」
「そんなに困っているなら借金でもしたらどうだい？」
何を言っているんだこのバアさんは。ギルドにも属していないこんな低レベルのただの戦士に金を貸してくれる金融業者なんて、何処にあるだろうか。
あるわけがない。僕が金貸しだったら絶対に貸さない。
「借してくれる所なんてありませんよ。あー、僕にいまだ目覚めぬ、眠れる力とかが宿っていればいいんだけどなあ。その力は強力な魔法で、ドラゴンでも一撃で倒せるみたいな」
「何言ってるんだい。人生はそんなに甘くないよ。そんなモノあるわけないだろ」
軽く怒られた。夢も希望もない人生だ。

「まあ、そんな話しはどうでもいいんですけど、ちょっと無理目の依頼でもいいんで、何かないですかね？」
「ないよ。また違う日に来な」
おそらくもう僕の相手をしたくないのだろ、少し機嫌が悪くなってきた。
「そんなこと言って、良い依頼を隠してるんじゃないの～？」
バアさんに食い下がる。
「しつこい！」
怒鳴られた。怒らせてしまったようだ。
これ以上機嫌を損ねたら、依頼を斡旋してもらえなくなる。
僕はこれからの付き合いを考えて酒場を出ることにした。

「町の近くにいるスライムや、吸血コウモリを倒しても金にならないしなあ」
町の自警団に属していれば、迷惑モンスターを倒した場合に討伐料が出るのだが、僕が勝手にモンスターを退治しても何もでない。
骨折り損のくたびれもうけだ。
くたびれるどころか死ぬ危険性まである。

なんとか日銭を稼げる方法を考えるけど思いつかない。
人間、地道に働かなくてはいけない。
けれども今の状況の僕では、それをすることもできないのか――

まあ、何でもいいからできる仕事を探すか。
この際、モンスター退治やダンジョン探索の仕事じゃなくても良いんだ。
道具屋や武器屋でも、この際ゴミ掃除やパン屋でもいい。
生きるために働く。

僕は、町の入り口の近くにある自警団の建物へ歩いていく。
自警団は町をモンスターや盗賊から守るだけでなく、町の治安を守ったり、落し物を探したりしてくれる。
道に迷った時なんかは場所を教えてくれたりもするのだ。
僕はその建物の入り口に立っていた人物に声をかける。

「すいません。ちょっと職業安定所までの道を教えてもらいたいんですけど」
職業安定所とは、仕事がない人に働く環境を提供してくれる場所のことであった。

・自警団にて

＊＊＊

入り口に立っていた人が道案内担当の人を呼びに行く。
椅子があったので、座って待ってると目の前に賞金首の張り紙があった。

・狂った科学者の操る【キラーマシン】
研究所を自らが作ったマシンで全て破壊した科学者。犯人以外の研究員は全員死亡。

賞金：１５０００ゴールド

・人喰いピーグル
狂犬。飼い主の命令を聞かない。捨てられた。

賞金：８００ゴールド

・堕ちた天使
人を食うことを覚えてしまった天使。一度人の肉を食べた天使はその味を忘れない。
光術系の魔法を使う。

賞金：２４００ゴールド

・始の魔女
以前この国を救った英雄の一人。国王に逆らったために賞金首になった。
道具に魔法をこめることができる。
賞金：９９９９９９ゴールド

おいおい、最後の魔女の賞金。シャレになってない。
こんな敵に合ったら、僕なんかは一瞬で消し炭になってしまう。

間もなく奥のほうから、自警団の人が来た。さっきとは違う人だ。
きっと、道案内を担当している人だろう。
僕に近づいてくると、声をかけてくれた。
「えーっと、職業安定所までの道のりだったかな？」
初老の男性だ。着ているねずみ色の制服は、良い感じに使い込まれている。
古くなってはいるが、キレイな制服。

「はい、お願いします」
僕がそう話すと道順を教えてくれた。
あまり解りやすくなかったので紙に道順を書いてもらう。どうやらこの町の役所近くにあるようだ。
ここからそんなに遠くない。歩いて行くことにしよう。

「ちなみにさっきその張り紙見てたよね？」
道を教えてくれた自警団の人が話しかけてくる。
「ああ、賞金首が載ってるやつですね」

「何か情報あったら、すぐに教えてくれよ」

「いいですよ。解りました」

「ただし、見つけても絶対に手を出すなよ……特にキラーマシンと魔女はな。殺されるのがオチだぜ」

言われなくてもわかっていた、僕のレベルで勝てる相手じゃない。キラーマシンや魔女と言わず、どれと戦っても一瞬で負ける自信がある。

・研究所

＋＋＋

「チクショウ……。ロクな仕事が無かったぜ」

やはり職業安定所に行ってもたいした仕事が見つからなかった。
保証人がいない人間には、まっとうな仕事がないらしい。

唯一あったのは『研究所での実験お手伝い』のみ。

仕事の説明が書いてあるパンフレットには、
短時間で高収入を目指す人集まれ。
保証人不要。
年齢、経験不問。
給料即日払い。
資格必要なし。
くわしい実験内容は、集合場所で説明させていただきます。
やる気がある人を募集しています。
なんてことが書いてあった。

この募集内容から察することができる。
――要するに誰でもいいってことだろ。

「すげえ怪しい」
何をさせられるのだろう。
研究所での実験と言うからには、

怪しいクスリを飲ませるのだろうか。
それとも怪しい人体実験が行われるのだろうか。
怖い。すげえ怖いけどやるしかない。でもまあ、とりあえず行ってみて駄目そうだったら帰ってこよう。

その時の僕の考えは、そんな感じだった。
でも、この時の甘い考えのせいでとんでもない事件に巻き込まれることになるのだ。

＊＊＊

仕事するための研究所に着くと、そこには結構な人数が集まっていた。
筋肉ムキムキで、体中に傷がある戦士。
老齢の魔術師。杖は相当使い込まれている。
この地域ではあまり見ることがない魔獣使いまでいた。
使役している魔獣は、
【八愛】猫を大きくしたような魔獣。強力な牙で相手を噛み砕く。人なっつこい。
【一角】人間に成り損ねたサルの成れ果て、鼻の所にある角で敵を貫く。
【波紋】詳しい能力は知らない。
見るからに歴戦の猛者だ。

しかも、そんな連中ばかりではない。
どう見てもズブの素人のような冒険者も結構いる。２〜３０人といった所だろうか。
装備してるモノがお粗末だ。
ほとんど使ったことがないような、真新しい剣や鎧を装備している。

おそらく短期間、高収入という内容に惹かれて来たんだろう。
もちろん僕もその中の一人であることは言うまでもない。

・研究所でのアルバイト！

＋＋＋

「この研究所での仕事を始めてもらう前に説明があります」
そう言ったのは、見た目が若い女性だった。
少しだけ笹のような形の耳から察するに、エルフの血を引いているのだろう。
正確な寿命はわからない。
エルフ族の寿命は、あきれるほど長い。
例えわずかながらでも、エルフの血が混じっていれば相当長く生きることができる。

「実験を始める前に、みな様にはこの待合室で順番待ちをしていただきます」
今いるこの部屋は相当広い――待合室っていうより、運動場、もしくは闘技場といったほうが相応しい感じだ。
場所は地下一階にある。遥か上にある天窓から光が入ってくるため暗くはない。

耳のとがった女性の話す内容は決まっているのであろう。
手にあるメモ紙を見て淡々と説明をはじめた。

――「今から番号札を配ります。それは無くさないようにしてく

ださい。
説明する内容は、簡単なモノです。
実験が始まったら、この部屋からスタッフはいなくなります。
我々スタッフは全員、研究で手が離せなくなるためこの部屋にいることはできないからです。

実験が始まったら、研究所の機密情報の管理関係上、みな様はこの部屋から出ることができなくなります。
私はこの部屋から退出しますが、その時に外側から鍵をかけさせていただきます。
その鍵は実験終了後に解除されますので、トイレなどは今のうちに行っておいて下さい。

誰か生きたい人はいますか？
誰もいないようですね。

行われる実験は3段階ほどありますので、皆さんにやっていただくコトはそのつど説明いたします」――
以上が説明の内容。

「なにか質問はありますか？」
耳のとがった女性がそう言うと、僕の隣にいた男が質問をする。
「今からこの仕事をやめたいと言ったら、それは可能なのかね？」
先ほど、この研究所の入り口で見かけた老魔術師だ。

「ええ、かまいませんよ。ただし、この部屋には残っていただきます。実験には協力せずこの部屋の椅子にかけてお待ちください。すべての実験終了後に依頼キャンセルの手続きをとらせて頂きます」

質問はそれだけだった。

そして、実験は始まる。

「これはハメられたかもしれんのお」

僕の隣にいた、老魔術師が言った独り言が聞こえてきた。

・研究所でのアルバイト！！

＋＋＋＋

やがて、耳の長い女が部屋から退出すると鍵がかけられた。
これで実験が終わるまで誰も外に出ることができない。

室内放送が流れた。
――締め切られた部屋で、先程の耳の長い女の声が聞こえる。
「それでは実験を始めさせていただきます。まず皆さんは、部屋の奥から出現するマシンと戦っていただきます」
たったそれだけ言うと放送は終わってしまった。

さっき老魔術師が言っていた言葉が気になっていた。
ちょうど僕の隣に座っていたので質問をすることにする。
「なんですか。ハメられたって？」
「今にわかるじゃろ」
そっけない答えが返ってくる。

目の前から何か出てきた。先程アナウンスされた実験のための機械が出現する。
人間を模したマシンのようだ。
馬鹿でかい体は金属製の三角すいを逆にしたようなカタチをしており、そこから細長い手と足が生えている。
左手には、銃弾を連射できるガトリングガン。

右手には、とうてい人間には扱えないだろう、大型のサーベルが装備されていた。
人間に例えると顔に当たる部分には、簡単なカメラが付いている。
継ぎ目の少ない流線型をベースにした無機質なデザインが不気味さを漂わせる。
装備されている武器から想像するに十中八九、戦闘用のマシンということで間違いないだろう。

「ん？何処かで見たことがあるな」
最近、見たような記憶があるのだが思い出せない。
僕はしばらく考えていると誰かの叫び声が聞こえた。

「うわあああああ！賞金首リストのキラーマシーンだ！！」
僕はその声を聞いてやっと思い出す。
道を聞いた自警団で見た賞金首リストの張り紙に載っていた賞金首。

【キラーマシン】が現れた。
キラーマシーンは戦闘体勢をとっている。
左手のガトリングガンを構えた。

「ほらの」
老魔術師が言ったとおりだったろといった顔で僕に話しかけてくる。
「これはどういうことですかね？」
目の前で起きたことに思考が追いついていかない。
僕は何が起きているか理解できていなかった。
「閉め切られた部屋に賞金首がいる状況が作られた。最初の女の言っていた実験というのは、このマシンの性能テストと言ったとこ

ろか……」

老魔術師がそう言い終わると、

――「嘘は言ってませんよ。この実験が終われば皆さんはこの部屋から出られますし、お給金もお支払いします」

さっきの女の声が部屋のスピーカーから聞こえる。

――「ただし生きてこの部屋から出てこれたらの話しですけど」

・研究所でのアルバイト！！！

＋＋＋

部屋の中は、混沌としていた。
戦闘体勢を取る者に、最初から勝てないと踏んで逃げ惑う者。
部屋から逃げるために入り口のドアを開けようとする奴もいたが、鍵がかけられた金属製の分厚い扉はビクともしなかった。

そんな逃げ惑う者達に向かって【キラーマシーン】が左手のガトリングガンで攻撃する。
炎撃の銃弾で攻撃。
入り口付近にいた男に、全弾命中。
攻撃を受けた男はダメージを受けた後に炎上。
消し炭なって死んでしまった。

それを見た多くの人間は、後ずさる。
たった一度、今の攻撃を見ただけで攻撃力の違いが解った。
それほどまでに圧倒的。高額賞金首である【キラーマシン】の戦闘力は異常だった。

――『戦ったら殺されるのがオチ』
自警団の人に言われたことは間違いではなかった。
部屋に絶望に似た雰囲気が流れ始める。

その中で勇敢にも戦いを挑む者もいる。
いくつもの厳しい戦闘をこなしてきた、戦闘のプロ。

体中に傷がある戦士と魔獣使いが戦闘態勢に入る。
老魔術師は、まだ戦闘に参加する気配はない。様子を見ているのだろう。

正直な所、僕は賞金稼ぎではない。ここは専門家に任せるとしよう

魔獣使いは使役している【八愛】【一角】【波紋】を放った。
【キラーマシン】にいっせいに襲い掛かる。
しかし、全くダメージを与えられない。
【一角】は角が根元から折れてしまい戦闘不能。

【キラーマシン】は雷撃の銃弾を放った。
左手に装備されたガトリングガンから、雷撃の特性を持った銃弾が無数に発射される。
【八愛】に命中。死んでしまった。
銃弾だけで死んでしまった【八愛】の死体に電撃の魔法が発動。
バリバリといった激しい音と共に、死体は消し炭になり無くなってしまった。

【波紋】がキラーマシンに襲い掛かる。体にへばりつき自爆した。
強烈な衝撃波と炎がキラーマシンを襲う。
爆風が部屋全体に吹き荒れる。
キラーマシンは、鉄でできたボディが少し歪んだ。
魔獣は全部死んでしまった。

使役している魔獣が全滅してしまった魔獣使いは、逃げようとしている。
【キラーマシン】は、右手のサーベルで魔獣使いを攻撃した。
魔獣使いは、真っ二つに切り裂かれされ死んでしまった。

それを見ていた老魔術師は、
「コレはまずいのう」と話す。
「そんなこと言われなくてもわかってますよ！」
見れば解る。強力な魔獣を使役している人間が一瞬で殺されたのだ。
残った奴ら全員で戦っても勝てる可能性は少ないだろう。

・研究所でのアルバイト！！！！

＋＋＋＋＋

部屋の残り人数は、後半分といったトコロだろうか……。
ずいぶんと減ってしまった。
【キラーマシン】に戦闘を挑んでいった冒険者はみんな死んでしまった。
僕が殺されるのも時間の問題だ。

「おまえさん。ワシに協力するんなら助けてやるぞ」
老魔術師に話しかけられる。
「なにか作戦があるんですか？」
喜んで協力しよう。
どうせこのまま手をこまねていてもゲームオーバーなるだけだ。

「お前をワシが使う転送の魔法でこの部屋から出してやる」
転移魔法。人の体を離れた場所に転送する。
高度な魔法技術が要求されるため、使える人間は一握りだけ。
転送できる距離は、術者の能力に比例する。
「おぉ、使える人間始めてみた。すごいなジイさん」
そんな便利な魔法が使えるんだったら、この閉ざされた部屋から脱出できる。

「しかし、条件がある」
「なんだよ」

悠長に話してる暇はない。いつ敵に襲われるか解らないのだ。
「実はワシの魔法なんじゃが……。自分以外の一人だけしか転送できない。魔力の関係から使えるのは一回だけ、そして距離は３メーターほど」
「短い距離でも、この部屋から出られればいいけど……」
例え僕がこの部屋から出れても、中に残ってる奴は逃げられない。みんなキラーマシーンに殺されてしまうだろう。

「それでこの部屋から出て、やってもらいことがある」
「なにをやればいい？」
老魔術師は頷いて話しだした。
「あそこで暴れている【キラーマシン】、おそらく部屋の外に操ってる奴がいる」
「そうなの？」
「ウム。あれはモンスターじゃない。魔法で動く機械じゃ。だから単独で動くことはできない」
「そういうものなんだ」
僕は頷いて話を聞く。
「そして、操ってる奴なんじゃが――おそらく戦闘力は低いだろう」
「なるほど。だから僕たちを、この部屋に隔離したわけだ……」
「その通り。だからこの部屋から出た後にそいつを探し出して倒して欲しい」
「ジイさんは、誰が操っているのか心当たりあるのか？」
「わからん。じゃが、あれ程大きな機械を操っているのだから――相当な集中力がいるはず」
「とりあえず動きを鈍い奴を探せばいいか……」
「そうしてくれ。ここはおそらく、後１０分もたないじゃろう。急いで行け」
「わかりました」

二人でやることを確認し終えると、老魔術師が魔法を唱え始める。
僕は、詠唱に邪魔が入らないように辺りを見回す。
高度な魔法には、とてつもない集中力がいる。
この魔法は失敗するわけにはいかないのだ。

しばらくして詠唱が終わると、僕の体はスライムのようなゲル状になってドアの隙間から出ることができた。

「なんか思ったのと違うな……」
魔法により体が光に包まれて移動するのかと思ったら、そうではなかった。

・アルバイト終了

＊＊＊

外に出て一番最初にやることは、ドアが開閉できるかの有無である。
内側から開かなくても、外側からは開けられるかもしれない。
けどそれは甘い考えだった。
この扉にはドアノブがない。どうやら魔法で開け閉めするタイプのようだ。

急がないと中にいる奴らがどんどん死んでいってしまう。
ドアはあきらめて、当初の予定通り【キラーマシン】を操っている敵を倒すことにした。

似たような扉に同じつくりの通路。
これでは自分が何処にいるか解らなくなる。

でもある程度目星はついている。
頭の中で最短ルートを計算し、そこに向かって全力で走った。

マシンを操っている術者は、無防備になる。
ということはなるべく離れた場所に身を隠すのだろうか。
でも、あまり離れすぎると【キラーマシン】のコントロールができなくなるかもしれない。
――あれだけゴツイ機械は、遠方から操るとなると相当厳しいだろう。

近くで身を守ることができる安全な場所――
僕が今までいた部屋は地下一階だった。この建物の最下層の場所である。
ということは――
おそらくこの場所にいるに違いない。

1階にある『ミーティングルーム』
ちょうど僕がさっき【キラーマシン】に殺されそうになっていた部屋の真上に位置する場所。
さっきの部屋に一番近い。
でも階が違うから、この場所に来るまで時間がかかる。だから安全。

目的地に着くや否や、僕はそこのドアを蹴破る。
予想通り人がいた。
僕らに実験の説明をしていた、エルフの血を引く耳の長い女だ。
「なんですかアナタは？」
「……まさかアンタが狂った科学者だったとはね。悪いけど時間がないから。サクッと殺らしてもらうぜ」
僕はそれだけ話すと、腰にさしていた剣を抜き相手に突きつける。

「ちょっと待って下さい！キラーマシンを止めますから見逃してください！」
慌てふためく耳の長い女。
この反応。やはりこの女で間違いなかったようだ。
「ここからじゃあ、【キラーマシン】が停止しているかどうか確認できない……。しかもこの間にも人が死んでるかも知れない。だから駄目だ」
僕はそう話すと、耳の長い女に斬りかかった。

一撃でカタがついた。
老魔術師が予想していた通り、操っている奴は弱かったのだ。
耳の長い女が倒れると、彼女の体からアイテムが落ちる。
――＞キラーマシンの腕輪＜を手に入れた。

＋＋＋

けれど一足遅かったようだ。
急いで一番最初にいた部屋に戻ったが全員死亡していた。

・アルバイト終了―その後―

＋＋＋

僕の命の恩人の老魔術師。
助けられなかった。亡骸は土に埋め、墓標の代わりに魔術師が使っていた杖を立てる。

「助けられなくて、すまなかったなジイさん……」

歩きながら考えた。
イロイロなことを――
これからの生活、戦い、人生。でも考えるだけだ。いつもどおりだ。

「まずは、自警団に賞金首を倒した報告をしないとな」
賞金首を倒したことなどないのでどういった手続きをすればいいのか勝手がわからない。
まあ、行けばなんとかなるか。そんなことを考えていた。

――＞キラーマシンの腕輪＜を装備した。
手に入れたアイテムはまず使ってみないといけない。
「僕に使うことができるのか」
エルフが使っていたアイテムだ。魔法が使えないと作動しないのかもしれない。

試しに今度の戦闘で使ってみよう。

しばらく歩くと町に着いた。なんとか無事に帰ってくることができた。
まずは、自警団の建物へ行く。

そこで賞金首討伐完了の手続きをする。書類に住所と名前、年齢。そして、賞金首を倒した経緯を書かされた。
その後に簡単な、口頭での聞き取りが行われ終了。

後日、現場検証と死体の本人確認が完了したら賞金を受け取ることができるらしい。
だいたい一週間ですむとのこと。
「そんなにかかるのかよ。もう5ゴールドしかもってねえよ」
最初の予定だと、即日で給料がもらえるはずだったのだ。
今日、お金が入ると思ってたのに……。

途中から賞金首討伐のミッションになってしまったのは予定外だった。
けどそんな文句言っていても仕方ない。
「まあ、いいや。あの状態で生き残れただけでもめっけもんだ」

今日のところは大人しく家に帰って、有る物で飢えをしのごう。
そしてぐっすり寝よう。
すげえ、疲れた。

家に帰り、部屋に入ろうとすると大家さんに声をかけられた。
「アンタ、ずいぶん帰ってくるの遅いじゃない。何してたんだい？」

（しまった……。今一番会ってはいけない人物に遭遇した）
「いやあ、ちょっと野暮用で……」
「そうかい、まあそんなことはどうでもいいんだけどさ。滞納してる家賃は何時払ってくれるのかね？」
言われると思った。最近顔を合わせるたびに聞かれる。
なんて金の取立てにきびしいババアだ。

まあ、2ヶ月も家賃を滞納してれば当然のことなんだろうけど。
「あ～、ごめんなさい。2週間後には間違いなく払いますんで、もうチョット待ってもらっていいですか」
「何言ってるんだい。そんなの信用できないね！何度同じセリフを聞いたことか」
「そこをなんとかお願いします」
手を合わせてお願いすると大家さんは、
「一週間だけ待ってやる。それ以上遅れたら今度こそ出て行ってもらうよ！」
と吐き捨てるように言うと家に帰っていった。

「ふーッ。やっぱりお金払う期日。長めに言っておいて良かった」
あのババアの考えなんてお見通しだぜ。

そのまま、自分の部屋に入ると一息つく。
「ノドがかわいたな」
そう独り言を言いながら水道の蛇口をひねる。
――何も出てこない。

そうだ、水を止められていたんだった……。
僕は、だいぶ前から水道料金も払っていなかった。

・トロルとの戦い

＋＋＋

「スライムって食えるのかな」
そんなことを考えていた。あまりにも腹が減りすぎていたために。
家にある食料は全部食べてしまった。
水は公園でなんとかなるから大丈夫だ。
残り少ない手持ちの金で買えるものなんて町になかった。

隣に住んでいる人に言って何か食べられる物を分けてもらおうか……。
でも、朝会った時に挨拶するぐらいの面識しかないのに、いきなりそんなこと言ったら変な奴だと思われるよな。
そんなことはできない。

――賞金の受け取りまで、後６日。

なんとなく町の外に出ることにした。
ここから先はモンスターが出る。
スライムが食べられるかどうか実際に試してみようと思ったのだ。
それが駄目だったら、そこら辺に生えている雑草を採って食べてみよう。
しばらく歩いていると、ここら辺で一番メジャーなモンスターに出くわした。
狙いどおりだ。
ブルーの半透明で、ドロドロとしたゲル状の体が特徴のモンスタ

ー。

スライムが現れた。
僕は腰にさしてあった剣を抜き、スライムに斬りかかった。
スライムにダメージをあたえる。
スライムの反撃。
弾力性のある体で体当たりしてきた。

僕は吹っ飛ばされて地面を転がる。
「いってぇえ！」
結構なダメージだ。
世界で一番弱いモンスターなのに大苦戦だ！
体勢を立て直してもう一度、斬りかかる。

スライムに剣を避けられた。
スライムは、体をムチのようにしならせて攻撃してきた。
急所に入った、鈍い音がする。大ダメージ！
僕はスライムの攻撃の反動で地面に叩きつけられた。
当たり所が悪かったんだろう。

口から血が出る。
「ヤバい……。内臓がやられてたら重症だ」

僕は逃げ出した。
「情けねえ……」
スライムにさえ勝てないのか。
いや、きっと腹が減っていたせいだ。
間違いない。
そうに決まってる。
そうであって欲しい。

ダメージを受けた所を確認したけど、大丈夫なようだ。
血が出たのは、口を切っただけだろう。
「ハァ～」
大きなため息をつくと――

「キャ――――――！！」
女性の悲鳴が聞こえてきた。
声のするほうに駆け寄る

すると少女がモンスターに襲われてる。

人間の大人の5倍はあるだろう大きさ、緑色の醜い体。
手には巨大な棍棒。
「トロルかよッ！？」
何でこんな所にいるんだよ。

比較的安全なここら一帯の地域には出現しないはずのモンスター。
腹をすかせて山から降りてきたのだろうか。
なんにせよスライムに歯が立たない人間では倒せるわけもない。

トロルが現れた。
トロルは少女に向かって棍棒を振りかざす。

「あぶねえッ！」
そう叫ぶと僕は、その場にタックルするような体勢で飛び込み、
少女の体を抱えて敵の攻撃をかわす。
棍棒の強力な一撃ですさまじいい轟音と共に――地面が砕けた。
大きな穴が開く。

意表を付かれたトロルは攻撃をミスした。
トロルは体勢を整えている。
どうしようあんな攻撃食らったら一撃で終了だ。
僕の人生が。

少女が一緒にいるので戦闘から逃げることもできない。

・エルフの少女

＋＋＋

少女は真っ白いワンピースの上に、同じ色のコートを着ている。
袖とスカート、そしてフードの部分に赤い文字の紋様が描かれていた。
高度な魔術文字を意味するものだ。
きっととんでもない値段がする高級品の服だ。
僕はそんなどうでもいいことを、戦闘中に考えていた。

「大丈夫か？」
少女に声をかける。
「はい、なんとか」
避ける際、何処かに頭をうったのだろう。
頭を左右にフルフル振っていた。
だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。
「逃げられるか？」
他の選択はない。
少女にそう尋ねると、
「ごめんなさい。足をくじいたみたいで……動けません」と答えた。
「マジかよ」
「私を置いて逃げてください、あとは自分でなんとかしますから」
死ぬつもりだ。
おそらく冒険者だろう。死に際を心得ている。

「そんなことできるかよ」
と言いながらもトロルはどうすることもできない。
どうしよう。
「では私が呪文を唱えている間、時間を稼いでもらっていいですか」
「わかった！」
無理無理無理無理。
いきおいで返事しちゃったけど絶対無理。
無理だけどそれしか選択肢は無い。
彼女にはトロルに対向出来る魔法があるのだろう。

彼女の方を見ると、すでに詠唱に入っている。
もう移動はできない。
どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。
棍棒を受け止めたら僕が死亡。
棍棒を避けたら少女が死亡。
どちらにしても死人が出る。

――そうだ、まだ使ったことないけど……

＞キラーマシンの腕輪＜を使った。
地面には光の魔術文字で描かれた魔方陣が現れた。
それに光が集まり【キラーマシン】が実体化。

キラーマシンが戦闘に参加する。
トロルはキラーマシンに向けて強烈な一撃を放った。
棍棒がキラーマシンにヒット。

ノーダメージ。

【キラーマシン】は戦闘態勢に入っている。

・使える武器は右手のサーベル。
・左手に魔法の弾丸を連射できるガトリングガン
＞雷撃の弾丸＜＞氷撃の弾丸＜＞炎撃の弾丸＜
・特殊能力：＞自爆＜

僕は右手のサーベルを選択した。
キラーマシンはトロルに襲い掛かった。
右手のサーベルで切りつける。
グチャリ――という鈍い音がした。
トロルの頭は剣圧によって潰されて、体は真っ二つになり倒れる。
モンスターを倒した。

「うわぁ……。エグい」
僕の目の前にいたトロルは、グチャグチャの真っ二つになって死んだ。
キレイに分断されているのではなく、力任せに切り裂かれた感じで。

「ありがとうございます。私の魔法は必要ありませんでしたね」
助けた少女に笑顔で話しかけられた。
「いやいや、……まあね。怪我はない？」
自分が使った【キラーマシン】の威力に自分でドン引きしながら答える。
「たいしたことはありません。大丈夫です」

さっきは戦闘中でバタバタしていたから気づかなかったけど、少女は笹のようなカタチの耳をしている。
先程の戦闘で詠唱していたスペルは黒魔法の一種……。

――エルフの魔法使い。
でもおかしい。そんなエルフが存在できるのだろうか。
森の守護者であるエルフ族が使う魔法は、黒魔術ではなく精霊なのだから。

・エルフの少女　2

＋＋＋

助けた少女は足をくじいていたので「おぶって町まで行ってあげようか？」
と提案したが断られた。
きっと恥ずかしいのだろう。
でも、ちょうどいい。
少女を背負っていったら、僕の残り少ない体力は無くなり死んでいたかもしれない。
もちろんトロルではなくスライムにやられた時の傷が原因で。

「君、純粋なエルフなの？」
「はい、そうです。ここら辺では珍しいのですか？」
「あんまり見ないね。ここら辺は辺境だから」
（さすがエルフ、超美形だ）
超可愛い。いや、美しいといった方がいいだろう。

一見すると幼い感じがするのだが、ひとつひとつの所作が落ち着いている。
エルフということから、恐らく見た目どおりの年齢ではないのだろう。

芸術家が大理石から削り出したような、整った顔。
体のラインこそゆったりとした服を着ているため判断できないが、短いスカートから出たほっそりとした長い足は、年齢不相応の妖艶

な雰囲気を漂わせる。
左の太ももの部分には、古代魔法の文字が刺青として刻まれており、いやでも目がそこにいってしまう。
白魚のようなほっそりとした指は、美しく長い。ここには刺青は無く、指輪もしていなかった。
普通の冒険者は自衛の目的から、選ばないだろう純白の魔導着。そこに書かれた血のように赤い文字はさらに術者を目立たせている。
服が少女を引き立て、少女もこの服を引き立てる。
一般的な魔法使いがよく使用する、詠唱用の杖は装備していない。代わりに持っているのは、左右の腕に銀色の腕輪、素材はプラチナ、ピンク色の宝石で古代魔術文字が刻まれている。

エルフの特徴である長い耳と同じく、大きな目も少しだけつり眼でありそれがなんとなく色っぽい。
唇は桜色で、髪はブロンド、そして瞳は紅い。
（紅い眼のエルフ……）
柔らかそうな唇から言葉が紡がれる。

「お兄さん、すごいですね。あんなに強いモンスターを一発で倒しちゃうなんて」
「まあね」
自分でもびっくりだ。＞キラーマシンの腕輪＜はなるべく使わない方が良いかもしれない。
強力すぎるからだ。
「無駄な脂肪や筋肉が無いスリムな体つきですね」
「……まあね」
ヒョロいだけだ。貧乏で何も食ってないから細いんだよ。
「きっとレベルもすごく高いんですよね？」
「……まあ…ね」
レベルは3しかありません。

最近強い敵を2体ほど倒しているが、自力で倒していない。
キラーマシンは操っている女の人を倒しただけだし、トロルはキラーマシンが倒した。
これではレベルが上がるわけがない。

町の入り口が見えてきた。ここまで来れば安全だろう。
とりあえず彼女の怪我を見てもらうために医者に行かなくてはいけない。

・フィウオン　レイニーのお礼

＋＋＋

エルフを医者に見てもらったところ、怪我はたいしたことないらしい。
かるい捻挫だそうだ。
彼女はこの町の住人ではなく。旅の途中でモンスターに襲われてるところを、僕に助けられたとのこと。
「ねえ剣士さま、お礼がしたいんですけど。これから時間あるかな？」
妙に支配的な紅い瞳が僕を見つめる。
「別に気にしなくていいよ。当然のことをしたまでだから」
「そう言わずに、お食事でもどうかしら。ご馳走しますよ」
これは飯にありつけるかもしれない。
今日のところは、これでなんとかしのげる。
「……じゃあ、せっかくだからご馳走になっちゃおうかな」
「そうしてよ。このままお礼もせずに帰してしまったら申し訳ないし」
「ではお言葉に甘えて」
僕たちは、食堂やレストランが集まっている通りに行ってお店を探すことにした。
歩きながら会話する。
「私の名前はフィウオン・レイニー。剣士さまはなんて言うのか

しら？」
「名乗るほどの名前ではないよ」
一度は言ってみたかったセリフだ。
ていうか下手に名前を教えたらレベルがバレる。これでも一応、冒険者として国に登録されているのだ。
「ふふッ、変った方ですね」
ピンク色のちいさな唇の端が、ほんのちょっとつりあがる。
「ていうか剣士さまって言うのはやめてくれ。そんなガラじゃない」
まともに剣を使えてないので。
今日なんてスライムも倒せなかった。

「いいよ。じゃあお兄さんって呼んであげる」
「そうしてよ」
エルフの年齢がわからない。
僕はなんて呼べばいいのだろう、なんて考えていると、
「私のことは、フィウでいいよ～」と言われた。
「わかった」
敬称が『ちゃん』にすればいいのか、『さん』にすればいいのか解らん。
とりあえず呼び捨てでいいや。なんか言われたら変えよう。

しばらく歩くと目的の通りに到着した。
中央のほうまで歩いていくと高級レストランが並ぶ場所に出る。
「ねえねえ、お兄さん、お兄さん。食事はここのレストランなんてどう？」
「……」
すげえ高そうなレストランなんですけど。
城でもないのに、なんで店の前に門があるの。
門のところには、衛兵の代わりに黒い礼服をきた男が立っている。

「わたし、ここで食事したいなあ」
紅い瞳に見つめられると、なんとなく逆らうことができない。
「僕は別にかまわないけど、この格好じゃ断られるんじゃないかな」
小汚い皮の服、しかも帯刀している。
こういった場所は、きちんとした格好じゃないと断られるはずだ。
「きっと大丈夫だよ。わたしが確認してきてあげるね」
フィウは、礼服の男に近づいていった。
彼女は、男と二言、三言会話すると、こちらに手を振ってきた。
「OKだって～」
（……まじっすか）
僕はこんな高そうな店で食事したことが無かった。

・フィウオン　レイニーのお礼　2

＋＋＋＋

店に入ると、背広を着た男に案内される。
僕は持っている剣を預け、フィウは上着を男に渡す。

上着を脱いだ彼女は、袖がない白いワンピースだけになる。
背の低さや体のシルエットから幼く感じていた雰囲気が、よりいっそう強くなった。
ほっそりとした長い足に続き、あらわになる白い両腕。
冒険者とは思えないような、傷がないきれいな肌。

赤い文字の刺青があるのは、左の太もものところだけのようだ。
スカートの少し下、根元に近い場所の後ろ前に円を描くように刻まれている。
手や腕はもちろん首のところや、胸元もきれいなものだ。
なんとなくフィウに目がいってしまう
それを見ていた彼女は、僕に妖しく微笑みかける。

通された席は、道路側で窓から外をを見ることができた。

僕はお店の人にメニューを手渡された。
「さーて、何を食べようかな」
と思ったが字が読めねえ。
ていうか値段が載ってない。

「お飲み物はいかがいたしましょう？」
（えっ、何か頼まないといけないんですか……）
飲み物を注文しないといけないような雰囲気が、その場に流れる。
だがメニューが読めないのでどんなモノがあるかわからない。

「フィウは何頼むんだい？」
彼女だったら、この何だか解らない文字で書かれたメニューを読むことができるであろう。
なにせ、自分でこの店を選んだのだから。
同じものを頼んでやる。
「お兄さんと同じものでいいよ」

「じゃあ、アルコールが入ってないやつでさっぱりした飲み物って、どんなモノがあります？」
やられた。
無茶振りだ。
仕方ないので、お店の人に適当な質問をする。

「ではグレープフルーツと炭酸水を使った、当店オリジナルのノンアルコールカクテルなどはいかがでしょうか？」
「おいしそうですね。ではそれを２つお願いします」
「かしこまりました。それでは、今お持ちいたします」
疲れる。右も左もわからないから非常に疲れる。
「良い雰囲気だね、このお店」
「そうだね」
どんな料理があるんだかさっぱりわからね。

その後、飲み物を持ってきたお店の人に片っ端から、メニューに載っているのはどんな料理か聞きまくった。

・フィウオン　レイニーのお礼　3

＋＋＋

高級レストランで食事をしながら僕らは話をした。

「そういえば、あのトロルを殺した機械の話なんだけど」

フィウに質問された。

「キラーマシンのことか。あれがどうかした」

「あれ…何処で手に入れたの？」

「この地域の国境近くにある研究所だよ」

「へえ」

フィウはなにか含みのある感じで答える。

「アルバイトで行った時に、その研究所で賞金首と出くわして戦ったんだ」

「【キラーマシン】って、高額賞金首だよね。確か１５０００ゴールドの――」

「そうだね」

ていうか食っているモノがうまい。

子牛のなんたら煮込み、なんとか風という覚えられないような名前の料理。

ソースが絶品で、肉が舌の上でとろけるようだ。

目の前のフィウが、僕に話しかけてくる。

レストランの中の暗い部屋でロウソクの火が揺れる。

その火に照らされたフィウの体が、少し艶かしく映し出された。

「そんな強い敵を倒すなんて普通じゃないよね。お兄さん」
「まあ、運が良かっただけだけだよ」
ホントに。ただそれだけ。
「よかったら。その＞キラーマシンの腕輪＜をわたしに譲ってくれないかな？」

「え？」
「わたしにくれたら、とってもいいことしてあげる」

「……」
「どんなことだと思う？」
「さあ」
「とっても気持ちいいこと――」

「ダメだ。子供がこんなモノ持ってたら危ないだろ」
フィウは子供だかどうだかわからんし、僕が持っていても危ないことには変りないけど。
「ちぇー」
舌打ちをして悔しがるフィウ。その反応だけ見るとホントに子供のようだ。

ご飯を食べ終えると彼女が泊まる予定の宿まで送って行くことになった。

「明日、この町を案内して欲しいな」
「う～ん、明日はちょっと忙し……」
言いかけたところで、フィウに話しかけられる。

「案内してくれたら、お礼に３００ゴールド出すよ」
「マジッすか」
「ご飯代も私が出してあげる」
やるしかねえ。どうせ明日の仕事のアテがあるわけではないし。
「引き受けよう。僕がこの町を案内してあげるよ」
「そう。ありがとう、お兄さん……」

これで明日の食ぶちは確保することができた。

・狙われるフィウオン　レイニー

＋＋＋

朝の市場は、たくさんの人でにぎわっていた。
主に食料がメインで扱われているので、普通の人は見てもあまり面白くないのだけれど、フィウは楽しんでいるようだ。
物珍しそうに、色々な店を見て回っている。

朝食は市場にある広場で食べることにした。
「ところでフィウはこの町には何しに来たの？」
「観光～」
彼女は売っているものを手に取りながら答える。
「こんな辺境に、わざわざ観光に来るなんて変ってるね」
この国の首都からは遠く離れ、一年を通して極寒の枯れた土地は作物も育たない。
住むのには、過酷過ぎる環境には動物もほとんどいない。
低すぎる温度は、モンスターでさえ拒絶する。
「そう？結構面白いわよ」
「それなら別にいいけど」

そんな話をしていると、僕らの隣でご飯を食べていたカップルの世間話が聞こえてきた。

――「役人から聞いたのだけれど、この近くに【鉄の騎士団】が来ているらしいわよ。噂だとこの町を狙ってるんじゃないかって……」

・【鉄の騎士団】
荒くれ者の元傭兵が集まってできた私設部隊。しかし、騎士団とは名ばかりでやっていることは盗賊と変らない。
彼らに襲われた町は、すべての物が奪われ、何も残らない。
この地域には、この町以外に彼らの獲物としてめぼしいモノはない。
十中八九、この町を襲うつもりだろう。

「どうしたの？」
黙り込んでいる僕にフィウが話しかけてきた。
「ああ、なんでもないよ。フィウ。観光は今日で終わりだ。僕が送ってあげるから、君の住んでる町に帰ろう」
【鉄の騎士団】に襲われたら、ろくな警備体制が敷かれていない、この町はひとたまりもないだろう。
「もしかして、【鉄の騎士団】を気にしているのかしら？」
「なんだ。聞いてたんだ。じゃあ、話は早い」
「逃げるの？」
紅い眼が僕を見つめる。
「そうだよ」
当たり前だ。まがいなりにも私設部隊、それを相手にして勝てるわけがない。

「でもきっとこの町の人たちは戦うわ。自分の住んでいる場所を守るために」
そんなことはわかってる。
極寒の荒地を一から開拓してきた人達だ。
自分たちが作り上げてきた町を安々と明け渡すはずはない。

「そんなこと言ったって、お前はどうするんだよ」
口調が少し荒くなる。
「あなたが戦うのなら、私も協力してあげるわよ。剣士さま」
彼女は僕のことを挑発するように言った。

・狙われるフィウオン　ＶＳ【鉄の騎士団】

＋＋＋

私設部隊、【鉄の騎士団】を相手にすることになった。

「あれだけ偉そうなこと言ってたんだからなんか良い案、あるんだろうね？」

僕はフィウに尋ねると、

「お兄さんの意見を先に教えてよ」と答えた。

まあ、いいや。僕の作戦をまず話そう。

「もう少ししたら、いや【鉄の騎士団】がこの町に来ることが確定したら――自警団による対策本部が設立されると思うんだけど」

「お兄さんは、それに入って戦うんだね」

フィウはうれしそうに言ってくる。

なにがそんなに楽しいのだろう。

死ぬかもしれないのに、いや死ぬ確率のほうが圧倒的に高いか。

「いや駄目だ。そんなことしてたら、敵を叩くチャンスが無くなる」

彼女の言ったことを否定する。

「じゃあ、どうするの？」

無邪気な子供のように、僕に尋ねてくる。

「地の利を生かす。渓谷を抜けるために使う、山を回りこむように作られた一本道がある。奴らがそこを渡り終わる寸前に爆破する」
対策本部ができるのなんて、敵が町の近くに来てからだろ。
そんなの待ってたら、相手の良いようにされるだけ。
敵が多かろうが、少なかろうが、戦力に余裕があろうが無かろうが先手を取ることが大事なんだ。
少しでも、こっちが有利な状況に持ち込む。

「え？でも渡ってる最中に壊した方が、たくさん敵を倒せるんじゃないの？」
「そんなことしたら、生き残って逃げた部隊の奴らに体制を立てなおす時間を与えることになる。だから、まずは退路を断つ」

「残った奴らは？」
「渓谷の橋を使ってきたらそこで迎え撃って――橋を落とす」
「橋を使わないで山中を抜けてきたら？」
相手はプロの戦闘屋だからそっちの可能性が高いだろう。
わざわざ橋なんて、トラップしかけやすそうな場所使わないよな。

「まあ、橋を使えないように落としてから――うーん、あんまりやりたくないんだけれど山に火を放つ」

「え―ッ？」
僕の言ったことに驚くフィウ。
「なにか？」
山に閉じ込めて、全員焼き殺す。

「ちょっと、やりすぎなんじゃないの？」
「だからやりたくないって言ってるだろ。でも、普通のやり方でやってたら勝てないよ」

「キラーマシンは使えないの？」
「あれは駄目だ」
僕は【キラーマシン】を使っている間、無防備になる。
少人数ならまだしも多人数を相手にしたら一気にボロが出て、スキをつかれて殺されるのがオチだ。

「まあ、でもその案は却下ね」
フィウは、そんなの話にならないわといった感じで両手を挙げて僕に言い放つ。
「なんで！？」
意味がわからない。
これ以上の作戦なんてあるのか。

フィウは、黙って自分のとがった耳を指差す。

「……」
そうだ彼女は、エルフだ。
エルフを目の前にして、山を燃やすとか――非常にマズイ。
殺されても文句言えないレベルだった。

エルフは山を住処として、精霊と共に生きているのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2565z/

理由がない悪意のクエスト。

2011年12月13日05時54分発行